人間文化創成科学論叢　第21巻　2018年

中国における学生エンゲージメントに関する一考察

鮑　　婕　嬰*

A Study of Students' Engagement in China

BAO Jieying

Abstract

The quality of higher education has become the focus of today's society. In the United States in 2000, Professor George Kuh launched a survey on the study of American students to capture the learning situation of students. In 2007, through the introduction of Tsinghua University, China's research on students' engagement has gradually increased. However, in China, the study of students' engagement is based on the American input questionnaire to master the learning situation of students. There are few theoretical studies on the concept of students' engagement. In addition, from the background of students, overseas students' learning and action research has also accumulated. In China, although there are also studies on students' engagement input from aspect of family social class, there are few studies on the family atmosphere. Based on the questionnaire survey of 928 college students, this paper explores the relationship between students' engagement and family atmosphere on the basis of knowing the studying situation of students.

Key words：student engagement, input, family atmosphere, theoretical studies, students' background

1．問題の所在と研究目的

戦後、多くの国は高等教育の規模を拡大してきた。高等教育の規模が拡大されていくにつれ、高等教育の性格も変化していった。マス段階からユニバーサル段階へと入ろうとしている時期には、高等教育の機会は国民の多くに開かれ、高等教育の目的は「エリート層の育成」から「より幅広い層への教育」へと転換する。その結果、高等教育は国民にとっての基礎教育へとその性格を変える。そのため、高等教育の選抜的性格は弱まり、高等教育の修了というだけでは十分とはいえなくなる。それに加え、産業社会と高度情報化社会の発展は国境を越えた各種の交流を増やしている一方､変化の激しい社会に柔軟に対応できる国民を養成するという社会的要請を受け、「どのように教えるか」を重視する「教育パラダイム」から「学生がどのように学んでいるのか」を重視する「学習パラダイム」へと移り、さらに、「学生がどのような能力を身に付けたか」を重視する「学習成果パラダイム」へと移りつつある。現在、多くの国の高等教育においてFD活動や教育プログラムなどの試みによって、学生へのエンパワーメントが目指されている。しかし、学生自身の積極的な参加無しには学生は成長しないため（山田2016)、高等教育の質評価においては学生の学習行動が一つの重要な要素となる（両角, 2009, p.192)。

中国における高等教育の粗入学率は2016年には42.7％に達している。高等教育が拡大されていく中で、高等教育の質は問題視されるようになってきている。そこで、中国政府は、「質の高い教員チームの養成」、「カリキュ

キーワード：学生エンゲージメント、インプット、家庭の雰囲気、理論的研究、学生の背景

＊平成30年度生　人間発達科学専攻

ラムの改革による学生の主体的な学びの強化」、「高等教育機関の科学研究能力」などの高等教育側の改善によって、高等教育の質の向上を目指しているが、学生の学習行動にもとづいて高等教育の質を把握する視点はいまだに重視されていない。アメリカにおいては、学生の教育過程に参加する度合いと、学生に有効な教育活動に巻き込む大学側の取り組みを測定する「学生エンゲージメント研究」は2000年代の初め頃に盛んになった。中国では、2007年後、清華大学の研究チームは、アメリカの教育研究者ジョージ・クが代表になって開発した「学習課題の水準」、「能動学習・協同学習」、「キャンパスの支援環境」、「学生と教職員との交流」、「豊かな教育経験」という５つの下位尺度で構成される米国大学生調査NSSE（National Survey of Student Engagement）を中国に紹介してから、中国における学生エンゲージメントに関する研究が蓄積され始めた。しかし、中国における学生エンゲージメントに関する研究の多くは、NSSE-Chinaの質問紙を用い、学生エンゲージメントの状況を捉えたものが多く、学生エンゲージメントという概念についての理論的検討は少ない。それに加え、海外における学生の学習行動に関する研究の中で、学生の学習行動だけではなく、学生の既得情報（インプット）を学習行動に影響する要因の一つとして位置付ける研究は見られるが、中国では、学生の既得情報と学習行動との研究を捉えた先行研究は見られるものの、主に学生の社会経済文化背景のような属性との関係を分析した研究である。学生の社会経済文化背景以外に家庭の雰囲気が学生の学習行動にもたらす影響について検討した研究は見当たらない。そこで、本稿は、「学生エンゲージメント研究」に関する理論を検討した上で質問紙調査によって学生エンゲージメントの状況を把握し、さらに、学生エンゲージメントの状況と学生が育った「家庭の雰囲気」との間の関係を明らかにすることを目的とする。

２．先行研究の検討

徐は中国長沙市にあるC大学の在校生1446名を対象に、NSSE-Chinaの質問紙を用い、学生エンゲージメントの状況を把握した。５つの下位尺度の中で学生と教職員との交流の次元を除き、他の４つの下位尺度で、女子の得点は男子より高く、一人っ子であるかどうかは学生と教職員との交流の次元で差異が見られる。学年によって学生エンゲージメントの差異が顕著である。大学４年生は各次元での得点は他の学年の学生の得点より高い（徐. 2016, p.132）。

韓は南京市のある理工系大学の在校生計3000名を対象に、「行為」、「認知」、「感情」という３次元で構成された質問紙を用い、家庭の社会経済背景と学生エンゲージメントの状況との関係について、調査を行った。その結果、学生の学習への投入の度合いは中程度以下であるという結果であった。「家庭環境」と学生エンゲージメントの関係について、「家庭経済状況」、「母親の職業」、「母親の学歴」は行為エンゲージメント、認知エンゲージメントと顕著な正の相関が見られるが、感情エンゲージメントと顕著な相関関係は見られない。それに対して、「父親の職業」、「父親の学歴」、及び「家庭環境」総得点は学生エンゲージメントとその各次元と顕著な相関関係が見られる（韓, 2014, pp.7-35）。

以上で提示された先行研究を見ると分かるように、中国における学生エンゲージメントに関する研究は、NSSE-China質問紙を用い、学生エンゲージメントの状況を捉えた研究が多い。学生の既得情報（インプット）と学生エンゲージメントの状況との関係に関する研究は見られるものの、主に学生の既得情報（インプット）の中での社会経済文化背景のような変えられない属性について分析した研究である。学生の社会経済文化背景以外に「家庭の雰囲気」が学生エンゲージメントにもたらす影響について研究は見当たらない。

３．理論的検討

３．１　アメリカで学生エンゲージメント（Student Engagement）が重視された社会背景

アメリカで学生エンゲージメントについての研究が進められたのは1999年代末頃からである。その背景には次の２点がある。

１点目は「プロセス指標への必要性」である。山田（2018, p.162）によれば、1990年代末頃に、アメリカで成

果（アウトカム）に基づく評価（ランキング）が盛んになり、高等教育の場面において成果を重視した教学経営が進められた。こうした動きは社会側の変化と要請を反映する一面を持ちつつも、アウトカムのみならず、学習・教育の過程（プロセス）を重視する必要性が指摘されている。より良く教育活動を行うために、成果のみならず、学生の経験も鍵となると指摘されている（相原, 2015, p.174）。葛城（2008, p.134）はパスカレラの提示した「カレッジ・インパクトモデル」を分析し、パスカレラの「カレッジ・インパクトモデル」の中で、「学生エンゲージメント」という概念に対応する「学生の努力の質」は単なるアウトカムの説明変数と位置づけられるだけではなく、「学生の努力の質」自体もアウトカムの一種になりうるとしている。

２点目は「発達理論に基づいた考え方」である。金子（2012, p.212）によると、学生にとって、10代後半から20代初めという時期は、広い意味での人格を形成する時期である。この人格を形成する重要な時期を大学という場所で過ごすことになるため、家庭の社会経済文化資本などの介入可能性の低い要素より、介入可能性の高い「発達的アウトカム」を重視する必要性が高まっている（小方, 2008, p45-64）。

３．２　学生エンゲージメントの研究枠組み

学生エンゲージメントの研究枠組みは主に次の５つがある。第１は、学生の学習時間がどのような学習効果をもたらしたかを研究したタイラーの学習時間（time on task）の理論であり、第２は、ペースの学生を「教育成果を生産する行為主体」として捉える理論である。そして第３は、学生の学習状況を多くの実証研究によって、大学が提供する施設や機会を利用する学生の「努力の質」の概念、キャンパス環境が学生の学習に与える影響に焦点を当てたアステンのI-E-Oモデル、および、それを原型としたカレッジインパクトの理論である。そして、第４は、社会的統合と学問的統合との間に存在する不一致に起因するティントによって提示された「退学モデル」である。最後に、第５は、ここで挙げられた学問的ツールを統合し、発展させたパスカレラの「学生の学習と認知発達への様々な大学環境の効果を評価するための一般的因果モデル」である（相原, 2015. pp.175-178）。

３．３　学生エンゲージメントの定義と次元

学生エンゲージメントの概念を一言で説明することは難しいが、山田（2018, p.165）によれば、学生エンゲージメントに関する定義は、学生エンゲージメントという概念を帰属感、自己効力感などの心理的側面を含めた「メタ構成体」として捉えることもあれば、学生エンゲージメントを「行動」、「感情」などの側面を含めた「多次元的構成体」として捉えることもある。相原（2015. p171）はOECDによるPISAにおける学生エンゲージメント（「生徒の学校への関わり」と呼ばれる）の定義について、学生エンゲージメントとは「広い意味での生徒の学校教育に対する態度や学校生活への参加の意味で用いられている」と述べている。学生エンゲージメントというが概念が含まれる次元の捉え方に関しては、２つの次元から４つの次元を有するなどさまざまな主張がある。総括的に言えば、学生エンゲージメントの概念は学生の大学に対して持つ帰属意識や大学の価値に対する見方についての心理的要素と、学校活動への参加についての行動的要素からなり立っている（相原, 2015, p.171）ため、「感情」と「行為」という２つの次元で構成されているとの主張がある。それに対して、以上で提示された「感情」の次元から、「認知」という次元を細分化させて、「行為」、「認知」、「感情」という３つの次元によって、学生エンゲージメントを捉えるのが最も一般的である。

「行為」、「認知」、「感情」の３つの次元のそれぞれの特徴を見てみよう。文字通り、行為エンゲージメントは「参加」というキーワードの下で、主に観察できる「行為」によって構成され、学業活動や課外活動への参加などが含まれる。「認知エンゲージメント」は「感情エンゲージメント」から細分化されたことで、この２つの次元は類似している面があるが、認知エンゲージメントは主に学習過程の中で、高次的な考え方やスキルを獲得するために投資した努力に重きを置く。それに対して、「感情エンゲージメント」は主にキャンパス環境の中での教員や学生の関係や大学への愛着感などの感情面に重点を置くものである。

４．研究方法

本稿は、学生エンゲージメントの概念が内包している「行為」、「認知」、「感情」の３つの次元に基づき、「当

てはまる」、「少し当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」の４件法を使った質問紙を構築した（以下、「当てはまる」に４点、「少し当てはまる」、に３点、「あまり当てはまらない」に２点、「当てはまらない」に１点を与え、平均値を計算している）。本稿で使用するデータは中国のT市における３つの国公立大学における調査から得られたものである。学部段階の学生に質問紙を配布し、３大学で質問紙の配布数は1,230部、そのうち928部の有効回答を得ている。有効回答率75.44％である。

５．調査の結果

５．１　行為エンゲージメントに関する分析

まず、行為エンゲージメントの下位尺度を確定するため３大学で得られた行為エンゲージメントに関する質問項目で探索的因子分析を行った。最終に「課外活動因子」、「違反行為因子」、「学習志向因子」という３つの因子が抽出された（表２）。

表２　行為エンゲージメントに関する質問項目の探索的因子分析

	課外活動	違反行為	学習志向
部活や学生自治会でリーダーを担当する	0.813	0.067	0.035
部活や学生自治会に参加する	0.774	-0.094	-0.111
ボランティア活動に参加する	0.636	0.002	0.076
授業で居眠りしたりしない	0.003	0.898	0.003
授業を無断に欠席したりしない	0.022	0.713	0.055
授業で携帯電話を弄ったりしない	-0.059	0.540	-0.117
2000字以上のレポートを書いた経験	0.002	0.026	0.598
教科書以外の所属学科に関する書籍の閲読	0.016	-0.016	0.592
娯楽書籍の閲読	-0.087	-0.044	0.444
授業に出る時間以外に学習に使う時間	-0.025	-0.077	0.428
1000字以下のレポートを書いた経験	0.091	0.041	0.413

因子抽出法：主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

次に、学生の行為エンゲージメントの状況を表３に示す。行為エンゲージメンメントは全体としてみると平均値は2.47である。また、行為エンゲージメントの各下位尺度の各質問項目得点平均値を見てみると、授業での違反行為の得点平均値は他の下位尺度得点平均値より高いという傾向がみられ、学生違反行為をする頻度が低い傾向が見られる。実際に授業にどのように参加するかはともかく、学生の授業に対する出席態度は真面目であると考えられる。「課外活動因子」と「学習志向因子」の得点ほぼ同じである。

表３　行為エンゲージメントの記述統計

	質問項目数	各質問項目得点平均値	総得点平均値
課外活動	3	2.44	7.32
違反行為	3	2.75	8.26
学習志向	5	2.43	11.36
行為エンゲージメント	11	2.47	27.21

５．２　認知エンゲージメントに関する分析

認知エンゲージメントの下位尺度を確定するため、３大学で得られた認知エンゲージメントに関する質問項目で探索的因子分析を行った。最終に「深い学び」、「能動的・協同的学習」、「ライフプラン」という３つの因子が

得られた（表４）。

表４　認知エンゲージメントに関する質問項目の探索的因子分析

	深い学び	能動的・協同的学習	ライフプラン
定期的に知識を復習、体系的に知識を把握することに取り組んでいる	0.797	0.049	-0.077
学習プランを立て、予習と復習に取り組んでいる	0.781	0.004	-0.053
領域をまたがる知識を使い、問題解決に取り組む	0.729	-0.051	0.058
領域をまたがった知識を統合し、新たな知識の発見に取り組む	0.642	0.067	0.132
授業後、授業でできた問題について同級生と討論する	-0.036	0.914	0.012
授業後、同級生と宿題について討論する	0.015	0.809	-0.017
ほかの同級生の勉強を助ける	0.281	0.435	0.025
自分の理想を教員に相談する	-0.04	-0.018	0.993
あなたは自分のキャリアについて教員と相談する	0.043	0.026	0.811

因子抽出法：主因子法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表５に示しているのは学生の認知エンゲージメントの状況である。学生は、高次的な考え方を獲得するための努力を表す「認知面」において、各質問項目得点の平均値は2.64という結果であった。「認知エンゲージメント」の各下位尺度の各質問得点平均値を比較してみると、３つの下位尺度の中で「深い学び」の得点が最も高く、学生は、体系的に知識を把握することや、領域をまたがる知識の運用などの方面において努力をしていると言えよう。「能動的・協同的学習」の下位尺度での得点は2.67であり、学生同級生との関わりの中で学習を行う状況は良好であると判断できる。３つの下位尺度の中で得点が一番低いのは「ライフプラン」である。学生は自分のキャリアや理想に関する考えが足りないと推測できる。

表５　認知エンゲージメントの記述統計

	質問項目数	各質問項目得点平均値	総得点平均値
深い学び	4	2.73	10.93
能動的・協同的学習	3	2.67	7.97
ライフプラン	2	2.49	4.98
認知エンゲージメント	9	2.64	23.81

５．３　感情エンゲージメントに関する分析

感情エンゲージメントの下位尺度を確定するため、まず、３大学で得られた感情エンゲージメントに関する質問項目で探索的因子分析を行った。最終に「学習への情熱因子」、「学習の価値因子」、「キャンパスでの関係」という３つの因子が得られた（表６）。感情エンゲージメントの状況を表７に示す。

表６　感情エンゲージメントに関する探索的因子分析

	学習への情熱	学習の価値	キャンパスでの関係
学習意欲が高い	0.932	-0.096	-0.089
学習に取り組む時、気持ちがよい	0.787	0.061	0.004
学習で出てきた困難に対しその対処法をよく考える	0.659	0.112	0.085
学習する時、時間の立ちが早いと感じる	0.651	0.043	0.036
所属学科は明るい未来があると信じる	0.623	0.002	0.113
学習は自分に対する理解を深めるためである	-0.026	0.936	-0.032
学習は社会に対する理解を深めるためである	-0.089	0.926	0.015
学習は社会に貢献するためである	0.058	0.74	0.022
学習はそのプロセスを楽しめるためである	0.177	0.676	-0.015
教員との関係は良好である	0.003	-0.023	0.949
同級生との関係は良好である	-0.031	0.17	0.769
大学事務との関係は良好である	0.062	-0.085	0.725

因子抽出法：主因子法回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表７　感情エンゲージメントの記述統計

	質問項目数	各質問項目得点平均値	総得点平均値
学習への情熱さ	5	2.89	14.43
学習の価値	4	3.17	12.66
キャンパスでの関係	3	3.03	9.11
感情エンゲージメント	12	3.02	36.20

表７に示しているように、学生の感情エンゲージメントの各質問項目得点の平均値は3.02であることから学生の感情エンゲージメントの状況は良好と考えられる。各下位尺度の各質問得点平均値を比較してみると、学生は「学習の価値」を大いに認めている傾向が見られる。これは、中国において古くから形成されてきた「学習による立身出世」という考え方が現在においても受け継がれていることの表れと考えられる。そして、学生は大学生活の中での人間関係の状況を表す「キャンパスでの関係」という下位尺度で、学生は同級生や教員・事務員との関係は良好であることを認める傾向が見られる。「学習の価値因子」と「キャンパスでの関係」の各質問項目得点平均値は３点を超えているのに対して、「学習への情熱さ」という学習に取り組む時の感覚を尋ねる項目での得点はやや低い数値を示しており、学生の学習意欲は相対的に足りないという状況が読み取れる。

５．４　学生エンゲージメントに関する分析

表８に示しているのは学生エンゲージメントの状況及び各次元得点の比較である。学生エンゲージメントの各質問項目得点平均値は2.72であった。学生は教育過程に参加するにあたり、感情エンゲージメトの状況は一番良好であるのに対して、行為エンゲージメントは相対的に低い数値を示している。その理由について、学生は、高等教育を受けられるのは、厳しい受験競争を乗り越えた自分自身による努力であると思うため、感情的に今までの自分自身のやってきたことの価値を認める傾向があるが、大学教育に進学すると、学生に自主的に学習を行う能力が求められるが、学生は大学教育での学習の特徴に適応できてない部分があると考えられる。

表８　学生エンゲージメント及び各次元得点の比較

	質問項目	各質問項目得点平均値	平均値
行為エンゲージメント得点	11	2.47	27.21
認知エンゲージメント得点	9	2.64	23.81
感情エンゲージメント得点	12	3.02	36.20
学生エンゲージメント得点	32	2.72	87.23

表９　家庭の雰囲気に関する質問項目に関する探索的因子分析の結果

	親からの支持	親の文化習慣	親の文化期待
両親はあなたを信頼し、一人で何かをやることを許してくれる	0.940	-0.041	-0.09
両親は両親と異なる見解を持つのを許してくれる	0.897	0.044	-0.041
両親はあなたの趣味を支持してくれる	0.819	0.03	0.037
挫折にあったとき、両親は慰めてくれる	0.735	0.034	0.109
両親は博物館をよく見学に行く	-0.064	0.883	-0.047
両親はよく美術展を見に行く	-0.134	0.838	-0.125
両親はよく旅行する	0.132	0.588	0.134
両親はキャリアに関する書籍を読んでいる	0.169	0.573	0.132
両親はあなたが多くの趣味を持つ人になることを期待している	-0.037	0.052	0.874
両親はあなたが豊かなメンタル生活を持つ人になることを期待している	0.087	-0.01	0.835

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

５．５　家庭の雰囲気

先行研究でも見られたように、中国で、家庭の社会経済文化背景（家庭の経済状況、両親の学歴等）による学生エンゲージメントに対する影響を捉えた研究は見られるものの、学生の「家庭の雰囲気」は学生エンゲージメントに影響を持つのかについて、検討を行った研究は見当たらない。そこで、本研究では、家庭の雰囲気は学生エンゲージメントに影響を持つかどうかを考察していきたい。

家庭の雰囲気について、「両親と異なる見方を持つことを許してくれる」などの13項目を尋ねている。家庭の雰囲気の回答は４件法を用いた。家庭の雰囲気に関する変数間の関係性（共通因子）を探るため、13項目に対して探索的因子分析を行った。その結果、「親からの支持」、「親の文化習慣」、「親の文化期待」という３つの因子が抽出された（表９）。

表10に示しているのは家庭の雰囲気の記述統計である。学生の家庭の雰囲気の各質問得点平均値は2.83であることから、大学生の家庭の雰囲気の状況はおおむね良好であると推測できる。「親からの支持」と「親の文化期待」の各質問項目得点平均値それぞれは３点を超えているのに対して、「親の文化習慣」の各質問項目得点平均値は2.31という数値を示している。

表10　家庭の雰囲気の記述統計

	質問項目数	各質問項目得点平均値	総得点平均値
親からの支持	4	3.12	12.86
親の文化習慣	4	2.31	9.22
親の文化期待	2	3.22	6.24
家庭の雰囲気	10	2.83	28.32

5．6　家庭の雰囲気と学生エンゲージメントの関係に関する分析

「家庭の雰囲気」が「学生エンゲーメメント」に影響を及ぼすかどうかを検討するため、「家庭の雰囲気」の下位尺度である「親からの支持」、「親の文化習慣」、「親の文化期待」を独立変数として、「学生エンゲージメント」の下位尺度である行為・認知・感情エンゲージメントを従属変数として重回帰分析を行う。

5．6．1　家庭の雰囲気と行為エンゲージメントの関係

まず、「家庭の雰囲気」と「行為エンゲージメント」の関係についての重回帰分析の結果を表11に示す。「親からの支持」、「親の文化習慣」、「親の文化期待」という３つの変数の中で、「親の文化習慣」は、学生の「行為エンゲージメント」に有意な正の影響を及ぼしている。つまり、家庭内部におの文化的な活動は学生の大学における各種の「参加」に影響を与えている。

表11　家庭の雰囲気と行為エンゲージメントの関係

	ベータ	有意確率
親からの支持	0.056	0.304
親の文化習慣	0.127	0.000***
親の文化期待	0.049	0.362
調整済みR2乗	0.21	

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

5．6．2　家庭の雰囲気と認知エンゲージメントの関係

次に、「家庭の雰囲気」と「認知エンゲージメント」の関係を表12に示す。表12の結果によると、「家庭の雰囲気」を代表する「親からの支持」、「親の文化習慣」、「親の文化期待」という３つの変数はいずれも学生の認知エンゲージメントに有意な正の影響をもたらしていることがわかる。この３つの変数の中で、「親の文化習慣」は学生の「認知エンゲージメント」に最も強い関係がある。家庭の雰囲気は学生の大学における学び方の選択や他者と協同的に学習を行えるかどうかや、キャリアに対する考え方に影響を及ぼしていると言えよう。

表12　家庭の雰囲気と認知エンゲージメントの関係

	ベータ	有意確率
親からの支持	0.056	0.003**
親の文化習慣	0.127	0.000***
親の文化期待	0.049	0.001**
調整済みR2乗	0.176	

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

5．6．3　家庭の雰囲気と感情エンゲージメントの関係

最後に、「家庭の雰囲気」と「感情エンゲージメント」の関係を表13に示す。表13を見ると、重回帰分析の結果によると、「親の文化習慣」は学生の「感情エンゲージメント」に有意な影響を及ぼしていないが、「親からの支持」と「親の文化期待」は学生の「感情エンゲージメント」に有意な正の影響を与えている。言い換えれば、家庭における親のとる文化的活動よりも、親からの愛情及び期待を受けられるかどうかが学生の感情エンゲージメントに強い影響を持つと推測できる。

表13　家庭の雰囲気と感情エンゲージメントの関係

	ベータ	有意確率
親からの支持	0.468	0.000***
親の文化習慣	-0.017	0.478
親の文化期待	0.265	0.000***
調整済みR2乗	0.488	

*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

6．考察

本稿では、アメリカの研究者ジョージ・クに代表された学生エンゲージメント研究に関する理論を検討した上で、中国T市における３つの国公立大学の学生を対象に、質問紙調査を通し、学生エンゲージメントの状況を捉え、これまであまり重視されてこなかった「家庭の雰囲気」が「学生エンゲージメント」にもたらす影響について検討を行った。行為・認知・感情エンゲージメントの３次元から分析すると、学生は大学で学習することの価値への認識や学び方などの意識の方面での得点は高いが、認知や感情の現れとしての行為については、学生の得点は低くなるという傾向が見られる。その理由としては、学生は高等学校までの勉強を経て、学習することの価値や学び方についてはある程度学習してきているものの、大学での学習は大学の自主性や協同性などが求められるため、学生は大学に入ってからの学習に適応できていないということが考えられる。学生エンゲージメントの状況を鑑みて、大学は学生を教育活動に巻き込む方策を探るのは当然であるが、大学での学習に対する心構えを学生に持たせるような「初年次教育」、「高大連携教育プログラム」の充実が検討される必要があろう。

今回の調査のデータから「家庭の雰囲気」が学生エンゲージメントに影響を与えていることも示唆された。家庭内部の雰囲気は、学生の大学での行動に直接に及ぼす影響は小さかったが、親からの愛情や期待などは学生の大学生活における動機づけに影響を及ぼしているため、子どもの大学進学以後も、学生の保護者たちは学生に関心をもつことに心がけるべきであろう。と同時に、保護者たち自身も、家庭内部で文化的習慣という行動面の表現は学生の学習へ取り組み方への影響を意識し、文化的習慣の形成に力を入れることが重要であろう。

参考文献

相原　総一郎（2015）「学生エンゲージメントの一考察―アメリカにおける学生エンゲージメント調査（NSSE）の発展―」『広島大学高等教育研究センター大学論集』第47集、pp.169-184

小方　直幸（2008）「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』第11号、pp.45-64

金子　元久（2012）「学生の成長と大学教育」『名古屋高等教育研究』第12号pp.211-236

葛城　浩一（2008）「学習経験の量に対するカリキュラムの影響力―大学教育によって直接的に促される学習経験に着目して」『広島大学大学院教育学研究紀要』第三部第57号、p.133-140

両角　亜希子（2009）「大学生の学習行動の大学間比較 ― 授業の効果に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第49巻 p.191-206

山田　剛史（2016）「大学教育と学生エンゲージメント」（http://www.keinet.ne.jp/gl/16/0405/04eng0405.pdf 2018年８月21日閲覧）

山田　剛史（2018）「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『古屋高等教育研究』第18号、pp.161～166

韓　暁玲（2014）《基於NSSE-CHINA大学生的学習投入影響因素分析》南京郵電大学碩士論文、pp.7-35

徐　遠超（2016）《大学生学習投入、学習策略与学業成就的関係研究》長沙大学団委、p.132